

地球惑星科学委員会 地球惑星科学国際連携分科会（第 25 期・第 2 回）  
議事録

1 日 時 2021 年 12 月 27 日（月）9:00～11:00

2 方 法 遠隔会議（Zoom）

3 場 所 主催会場：国立環境研究所

4 出 席

委員：沖 大幹、三枝 信子、佐竹 健治、田近 英一、中村 卓司、西 弘嗣、  
春山 成子、堀 利栄（以上会員）、東 久美子、小口 高、斉藤 文紀、  
鈴木 康弘、中村 尚、西山 忠男、原田 尚美、村山 泰啓（以上連携会員）、  
榎本 浩之、塩川 和夫、藤本 正樹（以上特任連携会員）

オブザーバ（代理出席）：森田 喬

5 議題等

- （1）前回議事録の確認
- （2）小委員会・関連分科会等からの報告
- （3）国内外の動向に関する情報交換
- （4）その他

6 配布資料

資料 1 地球惑星科学国際連携分科会第 25 期第 1 回議事要旨

資料 2 地球惑星科学国際連携分科会委員名簿

資料 3 国際連携分科会関係活動報告

資料 4 第 25 期日本学術会議地球惑星科学委員会組織図

資料 5 小委員会・関連分科会等からの報告

COSPAR 小委員会

INQUA 小委員会

IMA 小委員会

SCOSTEP-STPP 小委員会

SCAR 小委員会

IASC 小委員会

IUGS 分科会

IUGG 分科会

IGU 分科会

ICA 小委員会  
SCOR 分科会  
FE・WCRP 合同分科会  
WDS 小委員会

資料6 将来の国際対応分科会・小委員会のよりよい運営について (メモ)

## 7 議事内容

### (1) 前回議事録の確認について

- 三枝委員長より、前回議事録が委員に確認済みであることが伝えられた。
- 2021年2月に開催された学術フォーラム「新たな地球観への挑戦～地球惑星科学の国際学術組織の活動と日本の貢献～」ならびに、日本地球惑星科学連合2021大会のユニオンセッション「1時間でわかる学術会議：地球惑星科学分野の国際団体への支援」にて12の国際学術団体の役割や貢献について広く周知を図った旨、紹介された。佐竹委員より、学術フォーラムの内容については「学術の動向」にて出版された旨、紹介された。田近委員より、この学術フォーラムが推奨すべき活動の1つとして学術会議総会でも紹介されたことが報告された。

### (2) 小委員会・関連分科会等からの活動報告について

- COSPAR小委員会について、藤本委員から、COSPAR本体の執行部役員に、日本がプレゼンスを確保していくことの意味を議論したことなどが報告された。
- INQUA小委員会について、斉藤委員から、INQUA本体傘下の5つのコミッションの活動報告、役員改選、学術会議主催チバニ안의シンポジウムへの貢献などが報告された。
- IMA小委員会について、西山委員から、国際鉱物学年2022カウンシラーに大藤教授（東北大学）が任命されたことなどが報告された。
- SCOSTEP-STPP小委員会について、塩川委員より、SCOSTEPおよびPRESTOプログラム（2020-2024）の国際活動の情報交換を行なったこと、SCOSTEP執行部に会長（塩川委員）と2名の理事に日本人が就任したことなどが報告された。
- SCAR小委員会について、中村（卓）委員より、SCAR代表者会議（オンライン会議）への参加、SCAR中・長期計画の議論に中村委員と高橋委員が参加したことなどが報告された。
- IASC小委員会について、榎本委員より、2021年IASCメダルに大村先生

(スイス連邦工科大学名誉教授)の受賞、アイスランドと日本の共催で北極科学大臣会合が東京で2021年5月に開催されたことなどが報告された。

- IUGS 分科会について、西委員より、北里委員が IUGS 執行部の会計担当に再選されたこと、チバニ안의シンポジウムを2022年5月23日に学術会議講堂で実施することなどが報告された。また深刻な懸案事項として、IGC 大会(韓国)に日本地質学会が開催協力しているが、日本海呼称問題、竹島への巡検が計画されていることなど地球惑星科学委員会にて説明する予定である旨、報告された。
- IUGG 分科会について、東委員より、IUGG 傘下の8つの小委員会の活動報告、次の IUGG 総会(2023年、ベルリン)開催に向けた6つの委員会に日本人が4名の委員が選出されていること、International Hydrologic Prize に沖委員が受賞されたことなどが報告された。
- IGU 分科会について、鈴木委員より、氷見山委員が引き続き前会長として執行部にて活躍中であること2023年大阪にて「関係性の中の島嶼」というテーマ会議を開催の準備中であることなどが報告された。
- ICA 小委員会について、森田喬連携会員(伊藤委員の代理)より、イタリアのフィレンツェで2012年の ICA 大会の状況、同時開催された国際地図展にて天皇即位を記念して作成された東京周辺地形図(国土地理院作成)が2位を受賞したことなどが報告された。
- SCOR 分科会について、原田委員より、SCOR の副議長や予算委員会への貢献、2021年度 SCOR 国際ワーキンググループの申請書の審査の実施、傘下の3つの小委員会(「HIOE-2」、「SEMSEAS」、「GEOTRACES」)の活動支援の実施などについて報告された。
- FE・WCRP 合同分科会について、三枝委員長より、12月20日に分科会を開催し11の小委員会が対応している国際学術団体の動向の情報共有を行なったことなどが報告された。
- WDS 小委員会について、村山委員より、情報通信研究機構が10年間ホストを担ってきた WDS 国際 IPO としての任務が2021年3月末で終了したこと、Scientific Committee (2021-2024期)に NICT より石井守氏、村山委員が就任したことなどが報告された。
- 「その他」
  - 日本海呼称、竹島問題について  
春山委員より、同小委員会にて日本海呼称、竹島問題について議論してきたこと、これまでの日本の関連学協会における対応や外務省からの活動(WEBを通じた発信)などについて補足説明がなされた。小口委員より、韓国研究者らが韓国の独自見解を示す資料を IGU 参加者に配布するなどの政治的活

動について報告された。田近委員から地球惑星科学委員会でも情報を共有する予定である旨の発言もあった。塩川委員より、中国と台湾の表記についての経験も紹介された。

- 国際学術団体の調査票について

中村（尚）委員より、日本学術会議が拠出金を支出している国際学術団体の対応委員会調査票の精査の結果、加筆の依頼や執行部との意見交換等があるかもしれない旨説明があった。

春山委員より、「小谷元子先生・白波瀬佐和子先生と国際ユニオンとの懇談会」の開催案内等について紹介があった。

### (3) 国内外の動向に関する情報交換について

- 沖委員より、現状、国際学術団体に対応する分科会・小委員会の発足について、継続を迅速に承認する仕組みに改訂していく必要がある。その改訂案について、地球惑星科学分野のこの分科会から提案していくことも良いのではないかとの意見が出された。
- 斉藤委員より、小委員会の委員就任の委嘱状発行にも時間がかかるとの意見が出された。

### (4) その他 資料6 将来の国際対応分科会・小委員会のより良い運営について

- 三枝委員長より、国際学術団体に対応する国内委員会の継続的運営に関する現状と課題について、各委員に意見を述べてほしい旨、提案された。
- 西委員より、対応する国際学術団体の日本代表であるというお墨付きが得られれば必ずしも小委員会として活動する必要はないかもしれない。ただしこの場合、National Committee の代表であるということをどう証明するか工夫が必要との意見が出された。
- 東委員より、IUGG 分科会の場合、傘下の小委員会の委員長で国際的に認められている方でも連携会員でないために不都合が生じたり、IUGG 分科会の委員になれないなどの不都合が発生している。このような状況が発生しない工夫も必要と意見が出された。
- 中村（尚）委員より、何らかの工夫が必要ということについては賛同する。25期以前の時代に財政問題が発生した際など、地球惑星科学関連の分科会・委員会の数の多さを他の部局などから指摘を受け、国際連携関係の委員会の活動を見直しながら整理してきた経緯がある。結果、3年ごとに委員会活動の見直しをするということを見据えた手続きになっていると認識しているとの意見が述べられた。

- 春山委員より、今期の学術会議では国際連携を充実させる方針であると認識している。ISC傘下の国際学術団体対応の各委員会には、日本の国際的な研究プレゼンスを高めることをお願いしているところなので、日本の国内委員会を代表するという位置付けになっていることが見えにくくならないようにしていただきたいとの意見が述べられた。
- 中村（卓）委員より、次期の当初にはどの国際学術団体に加入料を支払うかが決まっているはずである。従って、他の常設委員会と同様に、期の当初から活動ができるよう手続きの迅速化を依頼できるのではないかとこの意見が述べられた。
- 中村（尚）委員より、中村委員の意見に賛同する。竹島の問題について日本学術会議の非難の種になる事態に発展しないよう慎重にことを進めることが大事だろうとの意見が述べられた。
- 田近委員より、国際連携については継続性が非常に重要であることから、学術会議の規則等の改正により改善できないかという議論がある。改訂に際しては、社会に国際対応の活動がしっかりと見える形がかつ継続的に活動できるようにすべきだろう。議論の継続を期待するとの発言があった。
- 三枝委員長より、社会からその活動がしっかりと見える形で、現状の仕組みではない方法で良い処遇の仕組みがないかと思案を巡らせているところである。引き続き議論をお願いしたいとの発言があった。

終了